



Title	第9章 伊達市におけるアイヌ民族・文化の位置づけと評価
Author(s)	新藤, 慶
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 31, 145-164
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54995
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_31_04_29.pdf



第9章 伊達市におけるアイヌ民族・文化の位置づけと評価

新藤 慶 | 群馬大学教育学部准教授

はじめに

本章では、アイヌ民族が多く暮らす伊達市という地域や、伊達市でのアイヌ民族への対応のあり方について、アイヌ民族、一般住民双方の評価を明らかにすることを目的とする。このことを通じて、伊達市におけるアイヌ民族や文化の位置づけのアイヌ民族側の評価と一般住民側の評価を比較することで、その異同を把握し、伊達市における課題を確認することにつなげたい。

第1節 伊達市におけるアイヌ民族・文化の位置づけについてのアイヌ民族の評価

第1項 伊達市におけるアイヌ民族に対する補助事業

はじめに、伊達市そのものや伊達市が案内を行っているアイヌ民族に対する教育・生活補助を、伊達市社会福祉課での聞き取り調査から確認してみたい¹⁾。ここで紹介された取り組みは、以下の5項目である。

1. アイヌ相談員（生活相談員）の配置

アイヌ住民の生活や教育相談への対応と有珠生活館の維持管理のため、嘱託職員として1名のアイヌ相談員を配置している。週4日は市役所で勤務し、週1日は生活館で勤務している。人件費は、北海道からの生活館に対する補助事業を用いており、3/4が道、1/4が市からの支出となっている。

2. 生活館活動の推進

アイヌ集落住民と周辺地域住民を対象に、交流と教養文化の向上を目的とした活動を、生活館を拠点に実施している。カルタを利用したアイヌ語の講習やアイヌ文化の伝承活動、児童による読書会などが行われている。

3. アイヌ住宅貸付事業

住宅の新築などの際に貸し付けを行う道の事業について、事務的な取り次ぎを市が行っている。

4. 北海道アイヌ協会伊達支部に対する補助金

1976（昭和51）年以降、市からは補助金を支出しており、現在は毎年81,000円となっている。

5. アイヌ民族文化祭補助

アイヌ文化の紹介と、伝承・発展を目的に北海道アイヌ協会が行っているアイヌ民族文化祭に対して補助金を支出している。人口規模により自治体からの補助額が決まっており、伊達市が位置づけられる「人口1万人以上の市町村」では、毎年3万円となっている。

また、有珠善光寺で行われているカムイノミ・イチャルパについても、「市のほうでは財政的な支援というのはなかなか難しい」という前提ではあるが、「教育委員会といたしましてもアイヌ文化の振興と伝承は重要な施策であることから、今後もアイヌ協会伊達支部と協議を行いながら協力をしてまいりたい」ということや、アイヌ協会が申請を行うアイヌ文化振興・研究推進機構からの補助金等について、「今後何か手続の問題で行政の力がそこで必要となってくるときには、文化課のほうで協力していきたい」ということが市議会で確認されている²⁾。

第2項 青年層の評価

このような取り組みが行われている伊達市について、ここでは、「アイヌと和人の交流の場を設けることについて」、「アイヌへの教育や生活補助について」、「アイヌを観光やまちづくりの柱にすることについて」の3つの観点について、意識を見ていきたい。まずは、青年層の意識を確認する。

アイヌと和人の交流の場については、以下のような意見が出された。

＜アイヌと和人の交流の場を設けることについて＞

【賛成】

- ・もっとやってほしい。(青年・女性)
- ・大事だと思います。(青年・女性)
- ・よいと思う。(青年・女性)

【反対】

- ・別に差別とか、そんなものはないから、交流も何も、みたいな気持ち。(青年・女性)

基本的には「よい」という評価が多い。しかし、「別に差別とか、そんなものはないから、交流も何も」といったように、日常的に「アイヌ」や「和人」という意識もなく、差別も感じていない場合には、「交流」といっても、感覚的に理解しづらいところもあるようである。

続いて、アイヌへの教育や生活補助については、次のような声が聞かれた。

＜アイヌへの教育や生活補助について＞

【賛成】

- ・無料でそうやって教育してくれるとかいうのはよいですね。(青年・女性)
- ・もっと出してほしい。(青年・女性)
- ・すべての支部で平等にしてほしい。(青年・女性)

【その他】

- ・わかんないです。(青年・女性)

第4章で見た「地域学習室」は伊達市の事業ではないが、そういったものを念頭に「よい」と評価するものや、「もっと出してほしい」といったように、より積極的に取り組むことの重要性が指摘されている。また、「すべての支部で平等に」というように、補助の運用の仕方についてアイヌ協会の支部間での差が存在することをうかがわせるものも見られる。一方で、「わかんない」という

ことで、教育や生活補助の効果については、青年層ではまだつかみづらい様子もみられる。

アイヌと観光やまちづくりについては、以下のように述べられている。

＜アイヌを観光やまちづくりの柱にすることについて＞

【賛成】

- ・白老とか、旭川とか、ああいうアイヌの面があれば、楽しそう。行きやすいところになれば。（青年・女性）
- ・後世（2世・3世）に伝えていくために必要だと思う。（青年・女性）
- ・それの方がメリットがあるのであれば。ただ、そういうことをすることによってどうなるかっていうのはわからない。（青年・女性）
- ・あってもいいと思う。（青年・女性）

基本的には「あってもいい」という声が大半である。そのなかで、アイヌ文化を「後世に伝えていく」面から必要だという考え方や、「楽しそう」で「行きやすいところ」を目指すというものなど、意義や活用のイメージなどが語られている。

一方、特定の論点ではなく、全般的な伊達市におけるアイヌへの対応のあり方について、以下のような声も聞かれている。

＜全般＞

- ・伊達市はアイヌ文化自体を理解していない。（青年・男性）
- ・伊達市は、特別なアイヌのことは、ほとんどない。（青年・男性）
- ・伊達市があまりアイヌ文化って扱っていないような気がする。（青年・男性）
- ・わかんないです。（青年・男性）
- ・とくにないです。（青年・女性）

まずは、「伊達市はアイヌ文化自体を理解していない」といったように、伊達市がアイヌのことを十分に理解できていないので、具体的な取り組みも進んでいないことが指摘されている。その反面、「わかんないです」「とくにないです」といったように、伊達市におけるアイヌ民族への対応について、特段の意見を持たない者も見られる。これは、青年層が、アイヌとしてのアイデンティティを問われる局面が比較的少なく、そうであるがゆえに、アイヌ民族への対応についても考えを持ちづらい状況が存在することをうかがわせる。

第3項 壮年層の評価

続いて、壮年層の評価を見たい。まず、アイヌと和人と交流の場については、以下のような声が聞かれた。

＜アイヌと和人の交流の場を設けることについて＞

【賛成】

- ・設けた方がいいと思う。(壮年・女性)
- ・伊達市全体はわからないけれど、この辺は関係なく交流しているのではないですかね。(壮年・男性)

【反対】

- ・アイヌと和人というところがわからない。生活しているなかで区別がないので、ピンとこない。(壮年・女性)
- ・別に必要ないと思う。アイヌと和人を区別することが違うのではないか。(壮年・女性)
- ・ちょっとこれ、わからないですよ。アイヌだから、和人だからというのは、もう今全然ないんで。(壮年・女性)
- ・和人との交流の場を設けるとするのは、私たちはずっとその人たちと働いているのだから、何も設ける必要はない。(壮年・女性)
- ・なくてもいいんじゃないかなと思う。たとえば市長とか、何かのときは偉い人が来るけど、根本的な交流って、そんなにあるのかな。(壮年・女性)
- ・あっても、アイヌの人が来ないと思うんです。「自分がアイヌだよ」っていうふうに、年取ればいくかもしれないけど、若い人は自ら行かないと思う。(壮年・女性)
- ・とくに必要ない。(壮年・女性)
- ・あまり関係ない。(壮年・女性)
- ・どうでもいいっていったら失礼だけど、それがいいのであれば、交流を設けてもいいと思うけどね。(壮年・女性)

【その他】

- ・わかんないです。(壮年・女性)

このように、「設けた方がいいと思う」というのは少数派であり、多数派は「必要ない」と考えている。その理由は、大きく3つに分けることができるだろう。第1に、「根本的な交流って、そんなにあるのかな」と指摘されるように、交流の実現性に懐疑的だからということがあげられる。一方、第2に、「アイヌだから、和人だからというのは、もう今全然ない」と指摘されるように、「アイヌだ」「和人だ」という区別自体が、日常的な意識には上ってこないからということがある。これは、差別を感じていないという青年層の意識と、比較的近いところがある。

ただし第3に、『自分がアイヌだよ』っていうふうに、年取ればいくかもしれないけど、若い人は自ら行かないと思う」というように、「アイヌと和人の交流」といった場に参加する場合には、自らをアイヌだと名乗ることが難しいからということも看過できない。アイヌという自覚を持つ場合にも、自らアイヌであることを標榜することへの抵抗感も存在する。しかし、アイヌという自覚がそれほど強固でない場合には、より一層、自らをアイヌと名乗ることには困難がともなう。アイヌであることを示すことで被る不利益を回避するという心理は当然であるし、アイヌとしてのアイデンティティが強固でない場合には自らをアイヌと規定することも難しい。このあたりの困難に対する配慮を欠いた設問となってしまったことは、反省せねばならない。

続いて、アイヌへの教育や生活補助については、次のような認識が示された。

<アイヌへの教育や生活補助について>

【賛成】

- ・助かった。あった方がいいと思う。額については現状くらいでいい。(壮年・女性)
- ・これは子どもを育てていくうえで必要。自分みたいに片親になったときに、収入も少ないなかで育てていかなければならないので、こういう補助があると生活は若干楽になる。(壮年・女性)
- ・続けた方がいいと思います。たぶんお金がなくて進学したくてもできない人がたくさんいると思うので。(壮年・女性)
- ・助かっています。高校生がいるので。ただ、金額がいろいろあるのですよ。教材とか。それで、制服とジャージが一緒になっていたのですけれど、もう少しその部分がほしかったなって。(壮年・女性)
- ・今までどおりでいいと思います。(壮年・女性)
- ・必要じゃないかな。(壮年・女性)
- ・拡大した方がいい。(壮年・女性)
- ・伊達市では取り組んでいないです。取り組んでもらえたら助かりますよね。(壮年・女性)

【その他】

- ・生活の補助っていうのは年配の人にはあるのかな？私見たこともないし、聞いたこともないからわからないですね。自分に関わってることっていったら教育の方でお世話になったっていうことだけなので。(壮年・女性)

このように、おおむね「助かった」という評価となっており、今後も「拡大した方がいい」という認識が多数となっている。ただし、現状でも「制服とジャージが一緒になっていたのですけれど、もう少しその部分がほしかった」というように、補助の具体的な運用面では課題が残っている。さらに、「生活の補助っていうのは年配の人にはあるのかな？私見たこともないし、聞いたこともない」というように、壮年層にとっては、自らの子育てに関わる教育面での補助くらいしか、具体的な補助を受ける場面が認識されていない様子も見受けられる。

一方で、「伊達市では取り組んでいないです」というように、市レベルでは取り組みが進んでいないことも指摘されている。アイヌ協会を通じて教育や住宅取得、免許取得などの補助を受けることはあるけれども、市独自の取り組みはほとんどなされていないことも課題として浮かび上がってきている。

続いて、アイヌと観光やまちづくりについては、次のような意見が出されている。

<アイヌを観光やまちづくりの柱にすることについて>

【賛成】

- ・いいと思う。いろいろな人がそれによって観光に来てくれればいい。(壮年・女性)
- ・ちゃんとした正しい文化が伝わっていけばよいかなと思います。(壮年・女性)
- ・あればいいと思う。(壮年・女性)
- ・この町に、アイヌの血筋の人たちが住んでいるということがわかってくれれば、将来的にはいいのかなと思います。(壮年・女性)

- ・アイヌっていうのを柱にしているのではなくて、海水浴とかで来た人が気づくっていうふうに持っていったらよいかって。それが1人が2人、2人が3人って、1人ずつでも増えていけばよいのかなとかって。(壮年・女性)

【反対】

- ・白老が行っているようなことをできたらいいけど、ここでは無理だと思います。(壮年・女性)
- ・する必要はないと思います。だって白老みたいに大々的にすることが、たぶん伊達市では無理だと思いますよね。(壮年・女性)
- ・伊達市は力を入れていないですね。でも、力を入れてほしいとは、とくに思わないですね。(壮年・女性)
- ・必要ないかな。別にやってもいいんだけどね。(壮年・女性)
- ・観光になるんでしょうかね。ならないと思うけれど。始めてもつぶれてしまって、なくなってしまうのではないですか。無駄な投資になるかもしれない。やらない方がいいと思う。(壮年・男性)

【その他】

- ・わかりません。伊達に住んでいても、伊達市にあまり興味がないというか、自分の生活がいっぱいいっぱい。(壮年・女性)
- ・観光的に進めた方がわかりやすいですね。ただ、市のためにやっているのか、本人たち（アイヌ民族）のためにやっているのかというのを、ちょっと感じる場所があります。(壮年・女性)

このように、アイヌと観光やまちづくりを結びつけることについては、賛否がかなりわかれている。まず、賛成の立場としては、「いいと思う。いろいろな人がそれによって観光に来てくれればいい」というように、アイヌ民族や文化が観光客を集める素材となることを肯定的に受けとめている様子が見られる。その反面、反対の立場からは、「白老が行っているようなことをできたらいいけど、ここでは無理だと思います」というように、先進的に取り組んでいる地域があるなかで、伊達市でどれだけのことができるかについて疑問が示されていることがうかがえる。アイヌ民族や文化を「見世物」のように扱うことについての抵抗感なども議論されたりする³⁾が、そういう声はあまり聞かれず、「伊達でやっても無理」といったニュアンスが大半を占めている。さらに、「進めた方がわかりやすい」としながらも、「市のためにやっているのか、本人たち（アイヌ民族）のためにやっているのか」という疑問も呈されている。アイヌ文化が、単に地域の観光資源にされるというだけでは、アイヌ民族にとっては受け入れがたい状況も見出される。

ただし、そもそも伊達市にはアイヌ民族や文化を生かそうという姿勢がそれほど強いものだとはいえ受けとめられていない。全般的な状況についてあげられた以下の声のなかからも、そのことが読み取れる。

<全般>

- ・頑張っているけど人手不足だと思います。(壮年・女性)
- ・伊達市は、伊達藩の祭りだ云々でやってるから、そっちの方が強いんじゃない？ただ、こっちの方にしては、全然関心は元からないのかなというぐらい、全然力の入りがない。(壮年・男性)

- ・伊達のアイヌと和人は、協力し合っているというよりも、別にお互いそんな、大して気にしてない。(壮年・男性)
- ・白老の方が盛ん。アイヌのいろんなことに対して。支援のことにしても、いろんなことをやるのは白老の方が多いて聞くんだよ。伊達は意外と消極的でやってないっていうのは聞いた。(壮年・女性)
- ・伊達市はアイヌに関わるべきだとは思うけど。関わってくれないからね、なかなか。(壮年・男性)
- ・役人さん方は一所懸命やってるだろうけど、市自体はどこまでやっているのか。(壮年・女性)
- ・やっているとは感じない。(壮年・男性)
- ・アイヌ政策というより、貧困対策や雇用対策をするべき。(壮年・男性)
- ・伊達市は、ウタリに対してあまり差別しすぎる。(壮年・女性)
- ・特別扱いっていうか、アイヌの枠っていうのは受け入れる人の方が少ないですよ。あるからどうぞっていうても、10人みんながそこに行きたいかっていったらそれはないと思うんで、そういう場がなくてもいろんな人が自立できるように国がすべきだと思う。(壮年・女性)
- ・伊達市に対してはとくに思うことはない。雪も少なくて暮らしやすい。有珠はお店が少なくなったので、お年寄り暮らししていくのが大変だと思う。(壮年・女性)

「頑張っているけど人手不足だと思います」と好意的な受けとめ方をしている者もいるが、「伊達市はアイヌに関わるべきだとは思うけど。関わってくれないからね」といったように、関心も薄く、関わりも消極的だと受け止められている様子がうかがえる。その結果、「伊達市に対してはとくに思うことはない」という、期待が持てないがゆえに無関心な状況を生み出すことにもつながっているようである。

しかし、「特別扱いっていうか、アイヌの枠っていうのは受け入れる人の方が少ない」というように、アイヌ向けの施策という位置づけでは、利用しづらいという様子もうかがえる。アイヌ向けの補助という形では、利用にともなうある種のスティグマが生ずるということかもしれない。そのため、「そういう場がなくてもいろんな人が自立できるように国がすべき」というように、「アイヌであるから特別に」というのではなく、不利益を生ずる属性を問わずに、社会経済的な不利益そのものを克服できるような仕組みづくりを求める声も上がっている。

第4項 老年層の意識

最後に、老年層の意識について見てみたい。まず、アイヌと和人の交流の場については、以下のようなことが聞かれた。

＜アイヌと和人の交流の場を設けることについて＞

【賛成】

- ・いいですよ。時々テレビで一般の人が、アイヌの踊りを一緒に踊ってみるとか。そういう場ってあまりないですね。(老年・女性)
- ・アイヌと和人の交流の場は設けるべきだね。こういうものを設けて、和人とアイヌといつも話

し合いをしたりすると、「お前はアイヌだ」とか、そういう差別待遇っていうのはなくなってくるんじゃないかと思う。(老年・男性)

- ・差別もないし、やっていると思う。隔たりがないようにはなっていると思う。(老年・男性)
- ・した方がいいのではないかな。(老年・男性)
- ・あまりやっていないので、やった方がいいと思う。(老年・男性)

【反対】

- ・今まで何もないから、これやってたって、やる人もいないよね。(老年・女性)
- ・そういうことは必要ない。(老年・女性)
- ・今さらやるようなことでもない。このまんまでいい。(老年・女性)

【その他】

- ・援助はしてくれているけれど、交流の場はない。(老年・女性)
- ・交流していると思うけど。(老年・女性)
- ・わからない、こんなの。(老年・女性)

これをみると、まずは、「こういうものを設けて、和人とアイヌといつも話し合いをしたりすると、『お前はアイヌだ』とか、そういう差別待遇っていうのはなくなってくるんじゃないかと思う」と語られているように、肯定的な評価がみられる。また、「交流していると思うけど」というように、現状で、すでに一定の交流は行われているという評価も見受けられる。しかし、「今まで何もないから、これやってたって、やる人もいないよね」と、交流には否定的な意見も聞かれている。これらは、現状をどう評価するかによる違いが存在しているものと考えられる。現状で交流が進んでいると考えていれば交流には前向きに、交流があまり進んでいないと考えれば懐疑的になってくると捉えられる。続いて、アイヌに対する教育や生活補助について、以下のようにまとめた。

<アイヌに対する教育や生活補助について>

【賛成】

- ・整っていると思う。(老年・女性)
- ・満足している。(老年・女性)
- ・もっと増やしていった方がいい。(老年・男性)
- ・今でも受けている。もっと充実してほしい。(老年・女性)
- ・このままやってくればよい。(老年・女性)
- ・引き続き必要だなと思うところがある。(老年・女性)
- ・あってもいいんじゃないの。拡充っていうわけじゃないだろうけど、ある程度教育っていうのは必要だからさ。(老年・女性)
- ・あった方がいいんでない。(老年・女性)
- ・あんまりしてないような気がするけど。(老年・男性)
- ・不十分ですね。伊達市だけでできる問題なのかわからないですけども、教育費とか生活困窮者に対するものを、もっともっと手厚くしてもらいたい。(老年・女性)
- ・全部ウタリ協会で行っている。伊達市はやっていない。やる気はないと思う。(老年・男性)

これをみると、アイヌ協会を通じて受ける教育や生活補助をイメージしている場合、「整っていると思う」と、肯定的な評価を与えている。しかし、伊達市によって提供される教育補助や生活補助を想定した場合には、「不十分ですね」といった評価になっている。本節冒頭で確認したように、伊達市による取り組みも行われてはいるが、なかには、「(教育や生活補助は) 全部ウタリ協会で行っている。伊達市はやっていない。やる気はないと思う」というように、伊達市の市政を批判する見解も示されている。伊達市という市レベルの取り組みは、進んでいるとはいいいがたいという意識が、一部のアイヌ住民には持たれている。

さらに、アイヌと観光やまちづくりの関係については、以下のように指摘されている。

<アイヌを観光やまちづくりの柱にすることについて>

【賛成】

- ・いいんじゃないですか。(老年・男性)
- ・あってもいいんでないの。(老年・女性)
- ・いいと思う。(老年・女性)
- ・観光やまちづくりは、今やっで行かないとまた消えていってしまうよね。白老みたいならずっとやっているけれど、他の地域がね。(老年・女性)

【反対】

- ・どっちかっていったら金儲けかなって。お客さんに媚を売ってるような。(老年・男性)
- ・伊達市は白老のようにやっていない。やらなくていいと思う。(老年・男性)
- ・どうだろうね。有珠はできないんじゃないかな。(老年・女性)
- ・そんな見世物みたいなことやらんくてもいいんでないのかな？このまんま、静かな感じでいいと思うけどな。(老年・女性)

【その他】

- ・こんなのわからないや。(老年・女性)
- ・わからない。(老年・女性)

ここでも、評価は大きくわかれていて。一つは「あってもいいんでないの」というように、賛成の立場が示されている。ここでは、「観光やまちづくりは、今やっで行かないとまた消えていってしまう」というように、この段階で取り組んでおくことの意義も指摘されている。

ただし、「金儲け」や「見世物」という受けとめ方をする者からは、否定的な反応が示されている。さらに、壮年層のところでも見られたような「有珠ではできない」といったような、伊達という地域で取り組むことの難しさにもふれられている。

最後に、全般的な伊達市の状況について、次のような声が聞かれた。

<全般>

- ・昔からみたらよくなったよ。俺の小さいころはダメだった。まだ和人の勢力が強いときで、アイヌ民族の意見なんかは聞かない時期というのがあった。それが、時代の流れ、(先住民の権利を認めることが) 世界的な流れになってきてるから無視できなくなってきたんだ。かなり偏

見がなくなっているってこと。先住民族というのがあるのだから、もうアイヌ民族をバカにしている時代じゃない。(老年・男性)

- ・今の市長がすごくてね、アイヌに理解があって一生懸命やってくれてるんですよね。市も裕福ではないんだけど、イチャルパなどへの補助をくれて、アイヌの文化にも非常に積極的にやってくれてるんですよ。(老年・男性)
- ・伊達地域は子どものころから、アイヌと和人が協力し合っている。(老年・女性)
- ・伊達市そのものが、アイヌを利用している。生活館だろうが何でもでしょ。あれはほとんどアイヌの名目で建ててやってんだから。本当はもう少しアイヌの方をかわいがってあげればいいんだけど。(老年・男性)
- ・大したことはしてないんだよね。伊達市全体としては、そんなにアイヌのことを深く考えてないの。(老年・男性)
- ・伊達市っていうのは評価しないよ。なにかね、今やってることを仕方なしにやってるようだ。(老年・男性)
- ・市議会に、アイヌの特別議席がほしい (老年・男性)
- ・わからないです。(老年・女性)

ここでは、伊達市におけるアイヌと和人との関係について、大きく異なる見解が示されている。まずは、「伊達地域は子どものころから、アイヌと和人が協力し合っている」というもので、和人のアイヌに対する理解や協力が積極的に行われていることがうかがえる。また、「昔からみたらよくなった」というように、以前は問題があったが、かなり状況が改善してきたという理解も示されている。

その反面、「伊達市全体としては、そんなにアイヌのことを深く考えていない」とする立場も存在する。とくに、「伊達市そのものが、アイヌを利用している」といったように、アイヌ民族に対して提供されるさまざまな補助事業を伊達市が利用する形でインフラ整備などに用いているという受けとめ方もなされている。このような状況を改善するために、「市議会に、アイヌの特別議席がほしい」という意見も出されている。

第5項 小括

それでは、本節で得た知見について、簡単に振り返っておきたい。そのために、伊達市のアイヌ民族に対する調査を行った大黒（1998）の知見を確認しておく。大黒は、伊達のアイヌ民族は、地域への愛着が強いことを指摘する。また、伊達のアイヌ民族の多くは、アイヌの伝統や歴史への志向性を持たない「脱アイヌ的意識」を持っており、その層は概して生活満足度が高いことを示している。その背景には、伊達氏によるアイヌ民族への温情的な施策と、パチェラー八重子によるキリスト教にもとづく活動が、伊達のアイヌ民族の「アイヌ的意識」を薄める効果を持ったことが述べられている。このように、「アイヌ的意識」と「地域への評価」という観点から、伊達のアイヌ民族は「アイヌ的意識が低く、地域への評価が高い」と整理されていると捉えられる。この「アイヌ的意識」と「地域への評価」という2点から、各年代層の特徴を捉えてみたい。

すると、第1に、青年層は「アイヌ的意識」は弱く、「地域への評価」も定まっていないと捉えられる。

自身がアイヌであることについての自覚が芽生えてから日が浅く、したがって「アイヌ民族に対して、地域がどう関わっているか」についても、評価を行うほどの高い関心は持てていない。しかし、ここで取り上げた交流、教育・生活補助、観光・まちづくりといった取り組み自体の意義は、一定程度認められていた。

これに対し、第2に、壮年層は、「アイヌ的意識」がやはり弱い、「地域への評価」はおおむね厳しいものとなっていた。ここには、「アイヌと和人との違いはない」とする日常感覚を持つ点で「アイヌ的意識」の弱さが見出される。その反面、アイヌ民族に対する伊達市の対応は不十分だとして、「地域への評価」は厳しい。ここから、日常的にはアイヌか和人かを意識する局面は少ないながら、アイヌ民族として一定の補助等を提供される権利主体であるとの認識も持たれていることがうかがえる。つまり、生活向上につながる権利の根拠となる「アイヌ」を手段として用いつつも、そういった権利を行使して達成するはずの目的の部分には「アイヌ」との絡みは薄いと捉えられよう。

さらに、第3に、老年層は、「アイヌ的意識」は高く、「地域への評価」は半々にわかれている。いずれも、アイヌ民族であるとの自覚は強い。ただし、それが必ずしも和人への反発につながるのではなく、以前から伊達ではアイヌと和人とが協力的であったことや、以前は問題があったかもしれないけれど現在では改善されてきたといった形で、「地域への評価」を高めている者もいる。

大黒の分析軸とはまったく異なる尺度を用いた本稿の結果を単純に比較することは慎まねばならないが、これらの状況から、「アイヌ的意識」は年代によって異なり、老年層では強まる傾向があること、「地域への評価」は、大黒らが指摘する伊達市におけるアイヌと和人の協力的な関係の記憶があると考えられる老年層では高く表われているが、そうした記憶を持ちづらい壮年層では、権利が保障されていない側面が強く認識されており、そのことが伊達市に対する評価を下げるとうかがえる。ここで浮かび上がった世代の違いは、ライフステージの特徴として、その年代にさしかかればそうした様相を帯びるようになるのか、特定のコーホートの特徴として捉えられるのかについては、さらに検討が必要である。ただし、ここでの検討から、大黒の知見には、「アイヌ的意識」は、ライフステージないしはコーホートによって多層性が見出されること、さらに「アイヌ的意識」は、アイヌという存在に自己の人生の目的を同一化させる「目的としてのアイヌ的意識」の次元と、現状の生活改善の手段として用いられる「手段としてのアイヌ的意識」の次元の双方があり、その点が「地域への評価」を左右しているということを付け加える必要があるだろう。

第2節 伊達市におけるアイヌ民族への対応についての一般住民の評価

続いて、伊達市におけるアイヌ民族への対応について、一般住民（33人）への聞き取り調査から、その意識を探ってみたい。一般住民の場合は、アイヌ住民が多く暮らす「有珠」地区に居住しているかどうか、大きな意味を持つ可能性がある。そのため、有珠地区の住民である場合、それを表示した。ただし、有珠地区の住民は老年層の3人だけである。

第1項 青年層の意識

まず、青年層の意識から確認する。青年層は、対象者が少ないこともあり、十分な聞き取りデータが集められなかったが、各論点について、次のような声が聞かれた。

＜アイヌと和人の交流の場を設けることについて＞

【その他】

- ・アイヌの人と関わったことはない。(青年・男性)
- ・何も思ったことがない。何かやっているのか、何も知らない。(青年・男性)

＜アイヌへの教育や生活補助について＞

【その他】

- ・アイヌだろうが和人だろうが、和人といたって、本当の和人ってなんだという話になる。みんな一緒でいい。制度は別にいいと思うけど、悪用しようと思ったらよくない。(青年・男性)

＜アイヌを観光やまちづくりの柱にすることについて＞

【反対】

- ・アイヌの文化を観光やまちづくりの柱にするのはいいが、どこまでできるか。阿寒のようにできたら立派だが、他にもすでに観光の場になっているところがあるので、そこに伊達が入って行く余地があるのかなと感じる。(青年・女性)
- ・まちづくりの柱にはならない。今までなかったものが、今さら出てきたってどうするということ。(青年・男性)
- ・まったくないし、そうすべきとも思わない。差別の温床になるのでは。(青年・男性)

＜全般＞

- ・伊達に来てから文化を残そうという取り組みをあまり感じたことはない。(青年・女性)
- ・考えたことがない。(青年・女性)
- ・伊達は、伊達武者祭りなど、いろいろなことをやっているが、アイヌ文化の取り上げ方にして全部中途半端。役所がひどいから無理だと思う。(青年・男性)
- ・「アイヌだから～しないと」という考えがよくないのでは。(青年・男性)

ここからうかがえるのは、以下の３点である。第１に、「アイヌの人と関わったことはない」というように、アイヌ民族の人々との実際の交流はあまり持たれていないということである。そのことは、第２に、「みんな一緒でいい」という、アイヌと和人を区別した対応は必要ないという考え方に結びついている。そこでは、アイヌを表に掲げた取り組みが「差別の温床になる」との認識があり、「アイヌ」ということを前面に出した取り組みに対する消極的な姿勢が見受けられる。

また、第３に、「アイヌの文化を観光やまちづくりの柱にするのはいいが、どこまでできるか」といった、伊達市におけるアイヌ民族や文化に関する取り組みに懐疑的な立場をとっている。これは、伊達市での取り組み方についての疑念ではあるが、自身がアイヌ民族や文化と接触した経験が乏しいため、具体的なイメージが持ちづらいということも関わっているものと考えられる。

第2項 壮年層の意識

次に、壮年層の意識を見てみたい。壮年層は、青年層以上に対象者が少ないが、以下のような意見が出されている。

＜アイヌと和人の交流の場を設けることについて＞

【その他】

- ・あまり耳にしない。設けても参加できない。ただ、時間に余裕ができれば勉強してみたい。(壮年・男性)
- ・とくにしていない。(壮年・男性)

＜アイヌへの教育や生活補助について＞

【賛成】

- ・よいと思う。(壮年・男性)
- ・アイヌの人がどういう生活をしているかわからないが、生活補助よりも、教育を補助した方がよい。(壮年・男性)

＜アイヌを観光やまちづくりの柱にすることについて＞

【賛成】

- ・いいと思う。ただ、アイヌの方の考えを尊重すべき。(壮年・男性)

【反対】

- ・別に柱にしなくてもよい。観光地でたまたまというのでよい。(壮年・男性)

【その他】

- ・アイヌ以外も潤う。ただ、伊達のアイヌ協会の人たちが、「自分はアイヌ」といいたがらないのでは？(壮年・男性)

＜全般＞

- ・今の市長は、アイヌに関することを積極的にやっている。(壮年・男性)
- ・市として公共関係でアイヌに関する活動は、まず伊達市の場合は見受けられないと思う。(壮年・男性)

まず、全般的に、「今の市長は、アイヌに関することを積極的にやっている」と「市として公共関係でアイヌに関する活動は、まず伊達市の場合は見受けられない」と、正反対の評価がなされている。これは、客観的な評価というよりも、本人の関心の持ち方の差だと捉えられるかもしれない。

個別の論点についてみると、アイヌと和人の交流については、「していない」という捉え方で一致している。これも、対象者自身の日常的な交流の少なさを反映しているものと受けとめられる。ただし、そのことは、アイヌ民族への無関心ではなく、関心の高さを生じることにもなり、アイヌ民族への対応の必要性を認識させることへとつながっている。教育や生活補助については「よいと

思う」という声が聞かれ、観光やまちづくりについても「いいと思う」という評価がなされている。ただし、「伊達のアイヌ協会の人たちが、『自分はアイヌ』といたがらないのでは」というように、日常的な交流の少なさから、自らアイヌを名乗る人がどれだけいるのか疑問を持つ様子も見受けられる。前節で、アイヌ民族の壮年層には、「アイヌと和人を区別していない」という意識が見られたが、壮年層の一般住民は、表立ってアイヌを名乗る同世代のアイヌ民族と接する経験をあまり持っていないことがうかがえる。

第3項 老年層の意識

続いて、老年層の意識を見てみたい。老年層は、対象者も多く、さまざまな意見が聞かれた。まずは、アイヌと和人の交流について、次のような見解が示された。

＜アイヌと和人の交流の場を設けることについて＞

【賛成】

- ・ いいのではないかな。有珠では、地域全体が日常的な交流をしている。(老年・男性)

【反対】

- ・ 今さら交流の場を設ける必要はない。(老年・男性)
- ・ 漁業者に何人かいる程度だから、必要ない。(老年・男性・有珠)

【その他】

- ・ アイヌと和人の交流は、伊達ではほとんどできていると思う。(老年・男性)
- ・ 普通に交流は今でもしている。(老年・女性)
- ・ 普通に交流している。(老年・男性)
- ・ 普段行ったり来たりしている。(老年・男性・有珠)
- ・ 木彫り体験の場などを交流の場と考えるのなら、そういう交流の場はできていると思う。(老年・女性)
- ・ あった方が理解は進むだろうが、知られたくないという人もいる。意志を尊重しながら、よき隣人として関わっていききたい。(老年・女性)
- ・ 今の国や地方自治体は、そういうアイヌのことはあまり頭にないと思う。(老年・男性・有珠)
- ・ 伊達に来て13年で、全然交流がない。(老年・男性)

交流については、「今でもしている」のであえて取り組む必要がないという立場と、「漁業者に何人かいる程度だから、必要ない」と、アイヌ民族がそれほど多くないために必要がないという立場の二通りがあることがうかがえる。また、「国や地方自治体は、そういうアイヌのことはあまり頭にない」というように、行政がアイヌと和人との交流を積極的に進める気がないという見解も示されている。その一方で、「知られたくないという人もいる。意志を尊重しながら、よき隣人として関わっていききたい」といったように、アイヌ民族の意志を出発点に交流を進めようという考えを持つ者もいる。

次に、アイヌへの教育や生活補助については、次のような意見が聞かれた。

＜アイヌへの教育や生活補助について＞

【賛成】

- ・アイヌの方に対する政策として、生活に困っていて教育や生活援助などを利用したいという人がいるのであれば、伊達市にはやってほしいと思う。(老年・女性)
- ・今後も続けた方がいい。(老年・男性)
- ・必要があるなら、NPOや財団を立ち上げるとか、金銭援助とかお金に限らない部分も含め取り組んだらいい。(老年・女性)
- ・伊達で行事に対して出している助成金は大きな金額ではない。(老年・女性)
- ・知られず、ひっそりとそういう制度がある程度でいいのかなという気はしている。(老年・男性)

【反対】

- ・そんなに貧乏はいない。皆、いい生活をしている。補助を受けたら、屈辱的では？(老年・男性)
- ・和人と同じ生活をしていて、年金も受給しているので、とくに必要ないのでは。(老年・男性)
- ・今の時代、特別には必要ない。(老年・男性・有珠)
- ・必要なし。(老年・男性・有珠)
- ・特別扱いする必要はない。(老年・女性)
- ・協会に入らなければ、そういう援助も受けられないというのは、差別でしょ。アイヌの人たちも、そういう制度があるから、それに甘んじている。そうでない人たちはかまわないで、自分の生きたいように生きればいい。でも、ここにあるように、教育に対しての補助は偏見だと思う。(老年・男性)

【その他】

- ・アイヌの人たちにウタリ資金を提供することについては、どういう理由でできたのか、根本的な意味がわからない。昔アイヌの人をだましたからお詫びの気持ちで出しているのか、和人もアイヌもないから、和人と同じようにアイヌにも出すという意味で出しているのか。(老年・男性・有珠)

一つには、「今後も続けた方がいい」という立場があり、「伊達が行事に対して出している助成金は大きな額ではない」といったように、具体的な対象にはややズレがあるが、いずれにしても伊達市が積極的に補助に乗り出しているわけではないことが示されている。また、アイヌ民族への配慮から、「知られず、ひっそりとそういう制度がある程度でいいのかな」という考えも見られる。

しかし、その反面、「そんなに貧乏はいない」「和人と同じ生活をしていて、年金も受給しているので、とくに必要ない」という見解も示されている。アイヌ民族の生活条件については、他の章でも確認したように、一般住民との間には一定の差が存在している。たとえば、世帯収入一つとっても、伊達市の一般住民では約520万円であるのに対し、アイヌ住民では約400万円と、100万円以上の開きがある⁴⁾。だが、そのような差を認識していない場合には、「特別扱いする必要はない」という考え方につながるものと受けとめられる。

その一方で、補助については、「協会に入らなければ、そういう援助も受けられないというのは、差別でしょ」や「アイヌの人たちにウタリ資金を提供することについては、どういう理由でできたのか」という、補助制度の運用や背景を問題にする人々もいる。アイヌへの教育や生活補助につい

ては、それが必要とされる背景への理解を広めることと、運用のあり方の改善が求められていると捉えられる。

続いて、アイヌと観光やまちづくりについての見解を見ていきたい。

＜アイヌを観光やまちづくりの柱にすることについて＞

【賛成】

- ・あまり聞かないけど、いいことだと思う。でも、本人たちは嫌がる。登別とか、店でやる分にはいいけど。(老年・男性・有珠)

【反対】

- ・アイヌの人は、イベントのときに口などに濃い化粧をするけれど、それは今は日常ではなく、アイヌの人も一般の人と同じように生活している。観光のイベントとしてそこだけをピックアップしてしまうと、小さい子など、「あの人たちはこうやって毎日いるんだろうか」というような、間違った認識を持ってしまわないだろうか。(老年・女性)
- ・有珠にアイヌの人たちに教えを説いたというバチェラー教会があるが、ただ建物があるだけで、あまりパツとしていない。アイヌの伝統行事は、観光化されるよりは、維持し、伝承していくことが大事。(老年・男性)
- ・前面に出すのではなく、また「アイヌの人や文化だから」というのでもなく、何かのときに「いいものだから」ということを紹介したらいい。(老年・女性)
- ・観光はなくていい。アイヌ文化にふれられれば。(老年・男性)
- ・白老に行くと大きな施設があり、充実している。アイヌの観光やまちづくりを伊達で行うというこの意味がどういうところにあるのかわからない。(老年・女性)
- ・白老はいいが、伊達は違うかな。(老年・男性)
- ・あまりアイヌ文化を見世物的にするのは好きではない。行政がそういうことをするというと反対するかもしれない。アイヌの実生活は昔とは全然違う。昔のようにアイヌの文化を守りながら生活しているわけではないし、みんなそれぞれテレビを見たりして和人と同じ暮らしをしている。そういう人たちが、「はい、アイヌですよ」と服装だけ変えて文化をやっても、はたしてそれが本当に文化の伝承になるのかなということで、ちょっとどうかと思う。(老年・男性)
- ・アイヌを観光やまちづくりの柱にしない方がいい。アイヌはもともと先住民なのだから、それを観光資源にするのは、失礼だと思う。(老年・男性・有珠)
- ・観光もアイヌの人たちを見せびらかすような、それで生活するような感じに持って行くのは嫌だと思う。(老年・女性)
- ・少数民族で人を集めているところは、世界でもないと思う。見世物ではない。(老年・女性)

【その他】

- ・そんなにしてないと思う。前は道議からいろいろあった。(老年・男性・有珠)

ここでまず見出されるのは、観光の対象となりうるアイヌ文化と現在のアイヌ民族の生活とのギャップである。この点は、「アイヌの人は、イベントのときに口などに濃い化粧をするけれど、それは今は日常ではなく、アイヌの人も一般の人と同じように生活している。観光のイベントとし

てそこだけをピックアップしてしまうと、……間違った認識を持ってしまわないだろうか」や「昔のようにアイヌの文化を守りながら生活しているわけではないし、みんなそれぞれテレビを見たりして和人と同じ暮らしをしている。そういう人たちが、『はい、アイヌですよ』と服装だけ変えて文化をやっても、はたしてそれが本当に文化の伝承になるのかな」といった声に象徴されている。たしかに、博物館的な空間での「アイヌ文化」と、現代のアイヌ民族の生活は異なっており、アイヌ民族といえども、日常生活は和人の生活とほとんど同じようになっている。そのようななかで、「見世物」的にアイヌ民族や文化を位置づけることへの違和感も表明されている。老年層は総じて、観光やまちづくりの手段としてアイヌ民族や文化を位置づけることを「失礼」という意識で捉えている様子がうかがえる。

最後に、全般的な状況について聞かれた見解を掲げておく。

<全般>

- ・伊達市のアイヌ民族や文化に対する扱い方について、伊達ではいろいろやっていると思う。大島直行さん（伊達市噴火湾文化研究所所長）という人がトップに立って、アイヌのいろいろな文化を展示したりしている。（老年・女性）
- ・伊達も大切にしていると思う。（老年・女性）
- ・先住民族の文化は残すべき。ただ、昔はアイヌを表に出していなかった。いじめもなかった。（老年・男性）
- ・市の働きかけは少ない感じがする。縄文関係はあるかもしれないけれど、アイヌ関係はないように思う。（老年・女性）
- ・伊達市は、伊達政宗については一生懸命やっているけれど、アイヌに対する取り組みについては聞いたことがない。（老年・男性）
- ・関心あるのか。守れる程度でよい。（老年・男性）
- ・あまり考えたことはない。アイヌの人たちのものを残さないといけないんじゃないかな。（老年・男性）
- ・アイヌが有珠にいることしか知らない。ふれあいがそれほどない。アイヌに対する取り組みは、市民がわからない。宣伝する対象は外の人で、市民ではない感じがする。（老年・男性）
- ・伊達は他の町と違って、アイヌの人は町の人（和人）に同化してしまっている。アイヌの観光にもつながるし、アイヌの人の住んでいる町だから、神送りなどアイヌの伝統文化行事は残してあげたい。行事の面で、熊や鮭をとることを規制しているから、場所はあるけど、アイヌ独自のいろいろな文化の伝承は難しい。（老年・男性）
- ・あまりアイヌのことは意識しないで生きている。取り組みは、有珠あたりにはあるかもしれないけれど、ここらあたりではわからない。（老年・女性）
- ・市役所でアイヌの何かをやっているというのは、聞いたことがない。アイヌの方がどれくらいいるかはっきりわからないが、有珠地区に何人かいるという程度だと思うので、人口に占める割合も少ないし、特に差別さえしなければいいのではないかなと思う。（老年・男性）
- ・伊達で暮らしているが、伊達市で何か取り組みをしているのかはわからない。白老のような取り組みはない。（老年・男性）

- ・アイヌと和人というようにわけて考えたことがないので、こういう設問だと、「アイヌと日本人は違うのか」「アイヌは日本人と考えていないのか」と疑問を持ってしまった。(老年・女性)

ここではいくつかの論点にふれられているが、とくに2点について確認しておきたい。第1に、伊達市におけるアイヌ民族や文化の扱い方についてである。たとえば、アイヌ民族や文化を「伊達も大切にしていると思う」という形で評価する声が聞かれている。それと同時に、「昔はアイヌを表に出していなかった。いじめもなかった」というように、アイヌ民族をいじめや差別の対象としてきていないという認識も示されている。これは、前節で触れた大黒が指摘する伊達におけるアイヌに対する温情的な関わり方を受けたものとも捉えられる。

そのこともあってか、第2に、「アイヌと和人というようにわけて考えたことがない」という声が聞かれている。「伊達は他の町と違って、アイヌの人は町の人（和人）に同化してしまっている」といったように、一般住民の間では、アイヌ民族の姿が見えなくなっている様子も示されている。そうであるがゆえに、「熊や鮭をとることを規制しているから、場所はあっても、アイヌ独自のいろいろな文化の伝承は難しい」ので、「伝統文化行事は残してあげたい」という配慮も生じている。このように、老年層の一般住民の間では、伊達においてはアイヌ民族や文化が比較的温かく取り扱われており、そうであるがゆえに、アイヌと和人の差異が認識されにくくなっているものと捉えられる。

第4項 小括

それでは、一般住民の意識調査から確認されたことを、大まかに振り返っておきたい。第1に、青年層においては、アイヌ住民との接点がなく、アイヌということを表に出すことを「差別」と捉える向きが見出された。日常的なアイヌ民族との関わりがないがゆえに、アイヌ民族や文化を腫れ物のように受けとめて、なるべく触らない方がいいという意識が生じているものと捉えられる。

第2に、壮年層においては、青年層と同様に、アイヌ民族との接点がほとんどない様子が見受けられた。しかし、壮年層の場合には、アイヌという存在を腫れ物にするのではなく、積極的に尊重すべきものという受けとめ方をしている者が多かった。よくわからないけれども、アイヌ民族や文化の価値を見出し、アイヌ民族であるゆえの不利益には、これを改善するための補助を行うべきとする考え方も示されていた。

一方、第3に、老年層では、人数が多かったこともあって多様な見解が示されたが、多数派の認識として、「アイヌは和人に同化している」というものが見出された。それは、伊達におけるアイヌの温情的な取り扱いによってもたらされており、その結果、アイヌ民族の生活は、和人の生活とほとんど変わるところがなくなっているとも捉えられていた。そうであるがゆえに、アイヌ文化を扱うにも、現在のアイヌ民族の日常生活とのギャップが問題とされ、教育や生活補助については、とくに必要ないという認識が示されている。とりわけ、アイヌ民族との接点が多いと考えられる有珠地区の住民で、その傾向が強かった。青年層や壮年層と異なり、老年層では全般的に一定のアイヌ民族との交流経験は持たれていることがうかがえるけれども、その経験が、「同化している」という認識を強めることに働いているように受けとめられる。一方で、客観的な生活条件の差異は、見落とされてしまいがちな状況も見られた。

第3節 まとめ——世代ごとの意識の対応関係

それでは、最後に、本章で確認された諸点を簡単に振り返っておきたい。

第1に、青年層については、アイヌ住民、一般住民とも、「アイヌ民族との距離の大きさ」が見出された。一般住民の青年層の多くはアイヌ民族との交流経験をほとんど持たず、その点で「アイヌ民族との距離」が大きくなっていた。一方、アイヌ民族の青年層も、自身がアイヌ民族であることを知ってから日が浅く、アイヌ民族としてのアイデンティティは強固なものとはなっていなかった。その点で、自身のなかで、エスニシティとしてのアイヌ民族と、アイデンティティとしてのアイヌ民族との間に距離が生じている様子が見受けられた。これらの「アイヌ民族との距離の大きさ」が、地域の枠組みでのアイヌ民族への対応の必要性を認識させにくくしており、アイヌ住民、一般住民双方から、地域におけるアイヌ民族対応については、肯定でも否定でもなく「わからない」という声が多く聞かれることにつながっていた。

第2に、壮年層については、アイヌ住民の場合、「目的としてのアイヌ的意識」はないけれど、「手段としてのアイヌ的意識」の存在が見出された。つまり、「アイヌと和人を区別していない」というように、自分自身を和人と異なるアイヌ民族であると捉えることはあまりなく、自己の生活の進むべき目標にアイヌ民族であることを位置づけることはしないが、生活面での課題解決のため、補助を受けうる権利主体としてのアイヌ民族を発動させることには積極的である様子が見出された。一方、一般住民の壮年層はアイヌ民族との日常的な交流はほとんどないものと受けとめていた。これは、「アイヌと和人を区別していない」ということと通じる。また、なかには課題の改善につながるのであれば、アイヌ民族への補助を評価する者もいる。ただし、「アイヌと和人を区別していない」という状況は、アイヌだけに対する支援の必要性を感じさせないことにもつながりうる。この点は、他の章で明らかとなった「アイヌへの補助は特別扱いになるのでよくない」とする意識にも通じるだろう。

一方、第3に、老年層のアイヌ民族は、アイヌ民族としての自覚が高く、「目的としてのアイヌ的意識」を持ち合わせていると捉えられた。他方、伊達市におけるアイヌ民族や文化への対応のあり方については、総じて高評価であり、「地域への評価」は高くなっていた。同じ老年層の一般住民に目を転じてみると、その多くは、「アイヌは和人に同化している」と捉えていた。そこには、たとえばアイヌ文化を「見世物」として位置づけることへの躊躇など、先住民としてのアイヌ民族への配慮も存在している。ただし、日常的な生活は、アイヌも和人も同じであり、生活条件の差異もほとんど認識されていない。しかし、このように、アイヌ民族を和人と「同じ」に扱おうとする一般住民の姿勢が、アイヌ民族の老年層にとっては、「昔よりも改善された扱い」と受けとめられている可能性がある。

このように、アイヌ住民と一般住民の意識を比較してみた場合、「アイヌ」や「和人」というエスニシティの共通性よりも、むしろ世代の共通性によって意識のあり方がかみ合い、対応関係が構成されている様子が見出される。

ただし、第4に、伊達市に暮らす人々の多層性は看過できない。一般住民とアイヌ住民は、表面的な生活の様子に大きな差がなかったとしても、そこには一定の客観的な社会経済的な差が存在している。さらに、アイヌ民族のなかでも、「地域学習室」利用者の分析（本報告書第4章）から示

されたように、「地域学習室」を選択肢の1つとすることのできる層と、「地域学習室」が必要でありながら、それを利用するためのネットワークを欠いている層など、さまざまな資源の差が存在していることも見落とせない。ここから重要となるのは、主観的なレベルでの差別意識の解消は、アイヌ民族の抱える課題すべての解消につながっているわけではないという視点である。今後は、アイヌ住民内の多層性もふまえながら客観的差異を把握し、それを生み出す構造をつかみ出すことで、差異にもとづく問題を解決する方途を描き出すことと、そういった問題解決の取り組みの必要性について、アイヌ住民、一般住民双方の共通認識を確立することに取り組んでいくことが求められるだろう。

注

- 1) 2013（平成25）年6月6日の伊達市社会福祉課での聞き取りより。また、伊達市社会福祉課がまとめたアイヌの福祉については、伊達市福祉部社会福祉課編（2013）を参照。
- 2) 2013年9月12日の9月定例会（第3回）での議員、教育長、教育部長の発言。伊達市議会会議録検索システム（<http://www.kaigiroku.net/kensaku/date/date.html>）より。なお、市からの財政支援が難しいのは、かつて行われていた道による「アイヌ文化活動強化事業」というアイヌの伝統行事への補助事業が、政教分離の原則に抵触しかねない恐れから、2009（平成21）年度に打ち切られたことが関わっている。その代わり、2010（平成22）年度からは、本文に掲げたやり取りにもあった財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構から補助を行う仕組みへと変わっている（2013年6月6日の伊達市社会福祉課での聞き取りより）。
- 3) 博覧会等におけるアイヌに対する和人の蔑視の問題については、たとえば小川（1997:119）などを参照。
- 4) 序章で紹介した、伊達市の一般住民に対するアンケート調査と、アイヌ住民への聞き取り調査にもとづいている。世帯収入の額は、「なし」「100万円未満」「100～200万円未満」「200～300万円未満」「300～400万円未満」「400～500万円未満」「500～600万円未満」「600～700万円未満」「700～800万円未満」「800～900万円未満」「900～1000万円未満」「1000～1500万円未満」「1500万円以上」の選択肢で尋ねており、それぞれの中央値をもとに平均世帯年収を算出した。一般住民では519.9万円、アイヌ住民では400万円ちょうどとなった。アイヌ住民調査の対象者には、年金生活をしている高齢者が多いという事情も関係しているだろうが、その点を差し引いても、社会経済的な面で、アイヌ住民が不利益を被っていることが確認できるだろう。

参考文献

- 伊達市福祉部社会福祉課編，2013，『平成25年度 市民福祉の概要』（<http://www.city.date.hokkaido.jp/hotnews/files/00000200/00000244/20131217141138.pdf>，2014.2.2取得）。
- 小川正人，1997，『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会。
- 大黒正伸，1998，「ウタリ社会と文化的記憶の葛藤——伊達市の社会調査」松本和良・大黒正伸編『ウタリ社会と福祉コミュニティ——現代アイヌ民族をめぐる諸問題』学文社，162-99。

（新藤 慶）